

報 告

子どもの心の健康教育に関する一考察

—子どもの自尊感情と親子の関係から—

権 美子¹⁾, 中村由美子²⁾

〔論文要旨〕

本研究では、助産師によるいのちのお話出前講座を子どもの心の健康教育と位置づけ、講座の影響を明らかにし、子どもの心の健康教育を行うにあたって方法を考察することを目的とした。学童期の親子を対象に、子どもの自尊感情、親子間の信頼感、家庭内で感じる雰囲気尺度等を用いて、講座前後に自記式質問紙調査を行った。

講座後、子どもの父親への信頼感と母親の感じる家庭の雰囲気得点が高くなっていた ($p < .05$)。また、講座前の子どもの自尊感情においてネガティブな回答の一つでも選んだ中群と、講座前の家庭の雰囲気および父・母への信頼感が低群にある子どもの得点が講座後高くなっていた ($p < .05$)。子どもの心の健康教育においては、子どもとともに、子どもの心の健康を支える親に着目した取り組みを提供することが有意義である。

Key words : 心の健康教育, 学童期, 自尊感情, 親子間の信頼感, 家庭の雰囲気

I. はじめに

子どもを取り巻く環境の急激な変化に伴い、子どもの心の健康が重要視されてきている^{1,2)}。子どもの心の健康は、乳児期からの養育者(親)との基本的な信頼(愛着)³⁾や自尊感情などが重要な要素となり^{4,5)}、茂木⁶⁾は子どもの肯定的家族観の評価が高ければ精神的健康度が増すと報告している。肯定的家族観の一つである親子の信頼感や家庭の雰囲気について酒井⁷⁾は、「小学生では信頼感を抱く相手は親が一番」であり、菅原⁸⁾も「子どもが感じる肯定的な家庭の雰囲気が精神的な安定に影響する」ことを指摘している。また、子どもの自尊感情を育むには、成長期における親の愛情と受容・承認が重要であるとの報告もある^{9,10)}。これらのことから、学童期の心の健康においても、自尊感情や肯定的家族観に基づく親子の関係に注目すべき

点があると考えた。

本研究においては、小学校で展開している「助産師によるいのちのお話出前講座」¹¹⁾(以下、講座とする)を、「いのちの教育」として子どもの心の健康教育の一つと位置づけた。学校での「いのちの教育」は、平成16年より児童生徒の問題行動対策の重点施策の一つとして始められた¹²⁾が、先行研究において、いのちの教育を子どもの自尊感情や親子関係に関連づけて研究されたものはほとんど見い出せなかった。そこで本研究では、子どもの自尊感情、親子間の信頼感、親子の感じる家庭の雰囲気等の側面から講座前後の変化を明らかにし、今後<子どもの心の健康教育>を行うにあたって方法を考察することを目的とした。

なお、本研究は所属する大学の倫理審査委員会の承認を受けた後に行った。

Study of Mental Health Education for Primary School Students —Self-esteem and Relationship with Parents [2307]
Yoshiko GON, Yumiko NAKAMURA 受付 11. 1.26

1) (社) 青森県助産師会 (助産師) 採用 12. 8.14

2) 青森県立保健大学健康科学部看護学科 (研究職 / 教育職)

別刷請求先: 権 美子 〒030-0861 青森県青森市長島 4-22-20

Tel : 017-723-4665 Fax : 017-776-2868

II. 研究方法

1. 講座の概要 (図)

講座 (90分1回のみ) は、小学4・5年生の子どもを対象とし、受精から出生までの経緯を知ること、助産師から出産の状況を聞くこと等で、自他のいのちの大切さに気づかせようとしたものである。講座前に親にその子が生まれた時の喜びを手紙にしてもらい、講座の後で子どもに読ませて親(家族)との家庭内コミュニケーションを促した。また、参加した親に学童期や思春期の子ども心の变化や健康、接し方について話し、親にも子どもとのコミュニケーションを促した。

2. 調査対象

A県内の小学校4校(a～d校)で調査を行った。期間は2009年5月～9月であり、対象は小学4年生、5年生とその保護者である。

調査対象とした地域は地方都市で、国民基礎調査¹³⁾による全国平均の三世帯世帯家族の割合8.4%よりも高く(13.8%)、児童のいる世帯におけるひとり親家庭の割合6.8%よりも高い(13.6%)。また、就労している母親の割合59.4%よりもやや高い(63.8%)地域でもある。

3. 調査方法

調査は自記式、無記名であり、3回行った。初回は親が手紙を書く講座前に行い、2回目は受講後1週間、3回目は1か月後に行った。1回目の調査時に、研究者が教室において協力を子どもに依頼した後、記載方法などを説明した。同時に調査依頼文を添付した子

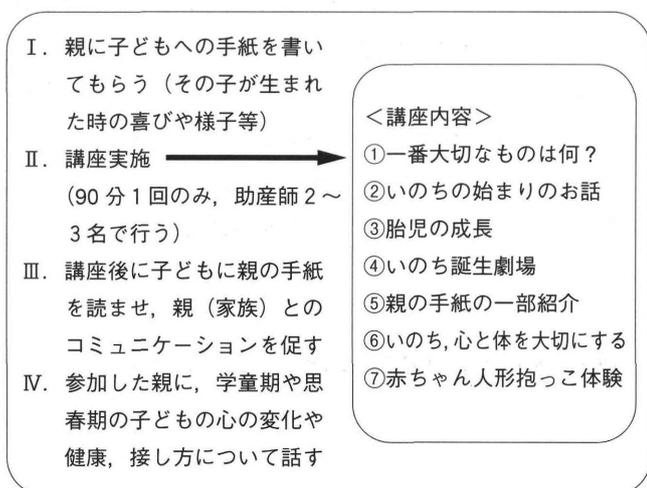


図 助産師によるいのちのお話出前講座の取り組みの概要

もと親の3回分の調査票を、回収用封筒と共に研究者が子ども一人ひとりに手渡し、各家庭に持ち帰らせた。ひとり親家庭の子どもには、母親または父親の調査票のみ配布した。各調査票には親子同一の番号が記されているが、個人が特定されないようにランダムな番号で配布した。調査毎に各家庭で各人が調査票へ記入後封入し、子どもに教室の回収箱へ投函させた。回答が記入された質問紙の回収をもって、今回の調査に同意したものと判断した。

4. 使用した質問紙とその概略

1) フェイスシート

講座前に、子ども用には自分の誕生時の話を聞いた体験の有無等を、母親・父親用には子どもの性別や学年、家族構成などの属性を、講座後は親子双方にコミュニケーションの有無等を尋ねた。

2) 使用した尺度

本研究では、子どもの心の健康の指標として下記3尺度を取り上げ、講座後各尺度得点が向上したことで、子どもの心の健康が増進したと判断した。

①子ども用基本的自尊感情尺度

本研究では、Rosenbergの自尊感情尺度を参考にした「子ども用基本的自尊感情尺度」¹⁴⁾を用いた。10項目の質問に対して、「とてもそう思う」、「思う」、「そう思わない」、「ぜんぜんそう思わない」の4段階評定で回答し、得点が高いほど自尊感情が高いと評価される。

②親子間の信頼感に関する尺度

この尺度は、酒井ら¹⁵⁾によって開発され、親子間の対人的信頼感を測定するための尺度である。子どもが親への信頼感を評定するものと親が子どもへの信頼感を評定するものからなっている。どちらも「はい」、「少しはい」、「少しいいえ」、「いいえ」の4段階

表1 親子間の信頼感に関する尺度 (子ども用)

1	お母(父)さんはあなたのことがいちばん好きだと思いますか
2	お母(父)さんはあなたをいちばん信頼していると思いますか
3	あなたといっしょにいてお母(父)さんは幸せだと思いますか
4	お母(父)さんはあなたに何でも話してくれますか
5	お母(父)さんをだれよりも信頼できますか
6	あなたはお母(父)さんといっしょにいて幸せですか
7	あなたはお母(父)さんが好きですか
8	あなたはお母(父)さんには何でも話せますか

評定で、得点が高いほど親子間の信頼感が高いと評価される。

③家庭の雰囲気尺度“居心地の良さ”

この尺度は、菅原ら⁸⁾によって開発された、個人が家庭にいるときに感じる居心地の良さを測定する尺度である。「あたたかい」、「楽しい」、「のびのび」、「ほっとする」、「つめたい」、「さわやか」、「たいくつ」、「からっぽ」、「にぎやか」の9つの形容詞を含む質問項目で構成され、子ども、母親、父親とも同一の質問項目である。「はい」、「少しはい」、「少しいいえ」、「いいえ」の4段階評定で、点数が高いほど居心地が良いと感じていることを示す。

子ども用には1), 2)の①~③, 母親・父親用には1), 2)の②~③によって構成される調査票を作成した。

5. 分析方法

講座前後の比較には、反復測定による一元配置分散分析を行い、時系列の主効果が有意だったデータにつ

いてBonferroniによる多重比較を行った。

分析には、統計解析ソフトSPSS ver 17.0 for Windowsを使用し、検定の有意水準は5%とした。

III. 結 果

235組の親子に調査票を配布し、3回行った調査での回収率の平均は、子ども83%、母親83%、父親76%であった。講座前後で、子どもの回答に欠損がなかった108組(46%)を分析対象とした。

本調査集団の属性について表2に示した。子どもの学年は4年生(77.8%)が大勢を占めており、子どもの約半数(52.8%)が第一子で、一人っ子の割合は22.2%であった。ひとり親家庭は17名(15.7%)で、母子家庭15名、父子家庭2名であった。母親の職業では、非常勤職(34.3%)が最も多かった。

講座前後の比較

講座前の各尺度得点の平均値は、子どもの自尊感情26.07±4.52点、家庭の雰囲気32.23±3.75点、母への

表2 属性

		n = 108	
		実数	(%)
子ども性別	男	54	(50.0)
	女	52	(48.1)
	不明	2	(1.9)
学年	4年生	84	(77.8)
	5年生	24	(22.2)
調査小学校	a	18	(16.7)
	b	15	(13.9)
	c	48	(44.4)
	d	27	(25.0)
同居保護者	両親	91	(84.3)
	ひとり親	17	(15.7)
家族構成	核家族	78	(72.2)
	拡大家族	30	(27.8)
きょうだい	あり	84	(77.8)
	なし	24	(22.2)
出生順位	第一子	57	(52.8)
	第二子	32	(29.6)
	第三子他	19	(17.6)
		平均 (SD)	
父年齢 (歳)		41.22	(6.09)
母年齢 (歳)		38.63	(4.59)
家族数 (人)		4.62	(1.31)
子ども数 (人)		2.36	(0.67)
職業形態	実数 (%)		
	父親	母親	
常勤職	68(63.0)	27(25.0)	
非常勤職	0	37(34.3)	
自営業	10(9.3)	6(5.6)	
専業主婦	0	31(28.7)	
その他	4(3.7)	3(2.8)	
不明	26(24.1)	4(3.7)	

表3 子ども・母親・父親の講座前後の比較

	Cronbach の α係数	調査時期	平均値 (SD)
			と講座前後の 比較 ¹⁾
子ども n = 108			
自尊感情 (10~40点)	. 717	講座前	26.07(4.52)
	. 738	1週間後	26.75(4.64)
	. 772	1か月後	26.71(5.13)
家庭の雰囲気 (9~36点)	. 781	講座前	32.23(3.75)
	. 756	1週間後	32.47(3.65)
	. 863	1か月後	32.95(3.92)
母への信頼感 (8~32点)	. 868	講座前	29.08(3.47)
	. 878	1週間後	29.29(3.31)
	. 851	1か月後	29.15(3.26)
父への信頼感 (8~32点)	. 918	講座前	27.77(4.66)
	. 868	1週間後	28.91(3.57)
	. 921	1か月後	28.23(4.33)
母親			
家庭の雰囲気 n = 96 (9~36点)	. 865	講座前	31.83(4.09)
	. 859	1週間後	32.63(3.73)
	. 912	1か月後	32.73(4.03)
子どもへの信頼感 (8~32点) n = 100	. 855	講座前	28.85(2.92)
	. 858	1週間後	28.99(2.99)
	. 896	1か月後	29.21(3.13)
父親			
家庭の雰囲気 n = 66 (9~36点)	. 892	講座前	33.00(3.13)
	. 876	1週間後	33.48(3.43)
	. 928	1か月後	33.44(3.52)
子どもへの信頼感 (8~32点) n = 77	. 820	講座前	27.66(3.17)
	. 802	1週間後	27.90(3.14)
	. 877	1か月後	27.92(3.08)

有意差がみられた比較のみ示した

¹⁾反復測定後の多重比較はBonferroni: ** p<0.01 * p<0.05

信頼感 29.08 ± 3.47 点, 父への信頼感 27.77 ± 4.66 点であった(表3)。

子ども, 母親, 父親の各尺度得点を講座前後で比較すると, 子どもの父への信頼感が1週間後 ($p = .031, < .05$), 1か月後 ($p = .018, < .05$) とも有意に高くなっていった。母親の家庭の雰囲気も, 1週間後 ($p = .031, < .05$), 1か月後 ($p = .008, < .01$) とも有意に高くなっていった(表3)。

1) 自尊感情

講座前の自尊感情得点(10~40点)を, 4点の「とてもそう思う」と, 3点の「そう思う」のポジティブな答えのみを選んだ得点群を高群(30~40点)とし, 2点の「そう思わない」と1点の「ぜんぜんそう思わない」のネガティブな答えを一つでも選んだ群を中群(21~29点), 2点と1点のネガティブな答えのみを選んだ群を低群(10~20点)として, 各群の講座前後の比較(表4)と群間の比較を行った(表5)。自尊心

表4 子どもの各尺度の群別講座前後の比較

平均値と講座前後の比較 ¹⁾				
子ども	時期	高群 n=27	中群 n=69	低群 n=12
自尊感情	講座前	31.93	25.14	18.25
	1週間後	31.04	26.14*	20.58
	1か月後	31.26	25.88	21.25
		高群 n=21	中群 n=74	低群 n=13
家庭の雰囲気	講座前	36.00	32.62	23.92
	1週間後	34.52	32.70	27.85*
	1か月後	35.24	33.34	27.08
		高群 n=26	中群 n=69	低群 n=11
母への信頼感	講座前	32.00	29.26	21.00
	1週間後	30.81	29.38	25.18
	1か月後	31.08	29.26	25.45**
		高群 n=18	中群 n=60	低群 n=15
父への信頼感	講座前	32.00	28.65	19.20
	1週間後	31.44	29.22	24.67*
	1か月後	31.28	28.55	23.27*

有意差がみられた比較のみ示した

¹⁾反復測定後の多重比較は Bonferroni : ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

情高群 ($n = 27$) と低群 ($n = 12$) は, 講座前後で有意な差は見られなかったが, ネガティブな答えを一つでも選んだ中群 ($n = 69$) において, 講座1週間後有意に自尊感情が高くなっていった($p = .021, < .05$), (表4)。

群間の比較では, 自尊感情中群は高群よりも講座前 ($p = .019, < .05$) と講座1週間後 ($p = .034, < .05$) の家庭の雰囲気が有意に低かった(表5)。また, 低群は高群よりも母への信頼感が講座前 ($p = .031, < .05$), 講座1週間後 ($p = .008, < .01$), 1か月後 ($p = .000, < .001$) とも有意に低かった。低群の属性では, ひとり親家庭の割合 ($n = 3, 25\%$), 一人っ子の割合 ($n = 6, 50\%$), 母親が非常勤職の割合 ($n = 5, 41.7\%$) が全体の属性よりも高かった。

2) 家庭の雰囲気(表4)

子どもの講座前の家庭の雰囲気得点(9~36点)において, 4点の「はい」のみを選んだ満点(36点)の高群, 「はい」以外の答えを一つでも選んだ中群(28~35点), 「はい」を一つも選ばなかった群を低群(9~27点)とし, 講座前後の比較を行った。高群 ($n = 21$) と中群 ($n = 74$) では, 講座前後の有意な差は見られなかったが, 低群 ($n = 13$) において講座1週間後の得点が有意に高くなっていった($p = .025, < .05$)。

3) 親子間の信頼感(表4)

子どもの講座前の父・母への信頼感得点(8~32点)において, 4点の「はい」のみを選んだ満点(32点)の高群, 「はい」以外の答えを一つでも選んだ中群(25~31点), 「はい」を一つも選ばなかった低群(8~24点)の講座前後の比較を行った。母への信頼感低群 ($n = 11$) の講座1か月後 ($p = .005, < .01$), 父への信頼感低群 ($n = 15$) の講座1週間後 ($p = .022, < .05$), 1か月後 ($p = .049, < .05$) とも有意に得点が高くなっていった。

表5 自尊感情の群別他尺度の平均値と群間の比較¹⁾

自尊感情群	家庭の雰囲気			母への信頼感			父への信頼感		
	講座前	1週間後	1か月後	講座前	1週間後	1か月後	講座前	1週間後	1か月後
高群	33.81	33.96	34.26	30.3	30.48	30.56	29.28	29.92	30.12
中群	31.51*	31.87*	32.61	28.94	29.21	29.09	27.47	28.64	28.19
低群	32.83	32.58	32.00	27.08*	27.08**	26.33***	25.56	27.89	23.22

有意差がみられた比較のみ示した

¹⁾一元配置分散分析後の多重比較は Bonferroni : *** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

4) 講座に関連した質問項目 (表6)

講座前に父母のどちらかと自分の生まれた時の話をしたことがある子ども (n=99, 91.7%) のうち、聞いた時の気持ちで「うれしいと思った」子どもは69.7%, 「あまりうれしくない」は3%, 「何とも思わない」が27.3%であった。講座後1週間以内に父母のどちらかと自分の生まれた時の話をした子ども (n=71, 65.7%) のうち、話を聞いて「うれしかった」は94.4%と高くなっており、「あまりうれしくない」が0%に、「何とも思わない」が5.6%に低下していた。講座1か月後の割合も同様な結果であった。講座1週間以内に子どもとその子が生まれた時の話をした母親の78.2%(講座前77.8%), 父親の85.7%(講座前69.2%) が「子どもはうれしそうだった」と記入していた。講座に参加した母親は45名(48.3%)で父親は1名であった。

講座前に親から自分の生まれた時の話を聞いた気持ち別に講座前後の比較を行ったが、「うれしかった」(n

=69), 「あまりうれしくなかった」&「何とも思わない」(n=30)とも、講座前後の有意な差は見られなかった。

IV. 考 察

学校教育の基本理念においては「生きる力」の育成が取り上げられ、子どもの「心」を育てることが教育の大事な目的の一つとなっているが、家庭という環境の中では子どもは親子の関係を軸として心身ともに育っていく。このことから、子どもの心の発達・健康には、学校教育だけでなく、家庭や親子の関係性が大きく影響し着目する必要があると考えた。本研究では、子どもの自尊感情、親子間の信頼感、家庭で感じる雰囲気等の側面からいのちの教育の影響を明らかにし、子どもの心の健康教育について考察する。

1. 講座の影響

1) 自尊感情

本研究において、講座前の子どもの自尊感情の平

表6 講座に関連した質問

子どもへの質問	n=108	講座前	1週間後	1か月後
「母親か父親と自分の生まれた時の話をした」				
話をした	99(91.7)	71(65.7)	82(75.9)	
話をしていない	6(5.6)	32(29.6)	16(14.8)	
忘れた	3(2.8)	5(4.6)	10(9.3)	
「話をした時の気持ち」(話をした子どものみ)				
うれしかった	69(69.7)	67(94.4)	75(92.6)	
あまりうれしくなかった	3(3.0)	0	1(1.2)	
何とも思わない	27(27.3)	4(5.6)	5(6.2)	
母親への質問	n=93	講座前	1週間後	1か月後
「子どもとその子が生まれた時の話をした」				
話をした	90(96.8)	55(59.1)	59(63.4)	
話をしていない	3(3.2)	38(40.9)	34(36.6)	
「話をした時の子どもの様子」(話した親のみ)				
うれしそうだった	70(77.8)	43(78.2)	50(84.7)	
あまりうれしそうではなかった	1(1.1)	3(5.5)	3(5.1)	
忘れた	8(8.9)	2(3.6)	2(3.4)	
不明その他	11(12.2)	7(12.7)	4(6.8)	
父親への質問	n=64	講座前	1週間後	1か月後
「子どもとその子が生まれた時の話をした」				
話をした	52(81.3)	14(21.9)	19(29.7)	
話をしていない	12(18.8)	50(78.1)	45(70.3)	
「話をした時の子どもの様子」(話した親のみ)				
うれしそうだった	36(69.2)	12(85.7)	19(100)	
あまりうれしそうではなかった	5(9.6)	1(7.1)	0	
忘れた	6(11.5)	0	0	
不明その他	5(9.6)	1(7.1)	0	

均値は26.07 (表4) であり、近藤らによる¹²⁾小学4・5年生の平均値25.8~26.9と比較して差はなく、対象の子どもは平均的な自尊感情得点を有していると考えられる。

講座前後を比較すると、高群、低群では有意な差は見られなかったが、講座前ネガティブな答えを一つでも選んだ自尊感情中群において、講座1週間後の得点が有意に高くなっていった ($p = .021, < .05$)、(表4)。小学4・5年生は、自己を模索し始める時期であり、自己に対する肯定感を育てていく年代である。いのちの大切さを伝える講座直後に、子どもは自分が生まれた時の親の喜びが綴られた手紙を読んでいる。また、講座1週間後に自分の生まれた時の話を親から聞いて「うれしいと思った」子どもの割合が、子ども全体でも高くなっていったが、中群においても講座前64.5%から93.8%に増え、話をした母親の85.7%、父親の81.3%が「子どもはうれしそうだった」と答えている。Coopersmith¹⁶⁾は、セルフエスティーム (自尊感情) に寄与している主なものに“重要他者”から寄せられている尊敬、受容、関心のある取り扱いの量を挙げている。親の喜びが綴られた手紙を読んだり親と話すなど、親子間がうれしい気持ちを共有体験すると、親の関心が自分にあることや関心の度合いをより強く子どもが感じ、その結果自尊感情が高くなったのではないかと推察される。低群ほどではないが、自分に対して少しネガティブな感情を持つ自尊感情中群の子どもには、この講座が親の愛情や関心、受容、自己の肯定感を感じ、自尊感情が高くなるきっかけとなり有効であったと思われる。

高群はもともと自尊感情が高いまま安定しており、中群よりも家庭で感じる雰囲気も良く (表5)、講座の影響として現れなかったと思う。一方で、12名の自尊感情が低い子どもは、講座の取り組み後も自尊感情は低いままであった。学童期においては、家庭や親子関係以外のことが自尊感情に影響していると考えられるものの、低群の属性の特徴に「ひとり親家庭」、「一人っ子」、「母親が非常勤職」の割合が高いことから、自尊感情と子どもの家庭のありようとの関連がうかがえる。学校における心の健康教育は、集団を対象とした心の健康を保持し育てる活動と、個別の対策との両面の対策が必要であると指摘されている¹⁶⁾。自尊感情が低く本研究で示された低群の属性が重なる子どもには、集団に対する取り組みとともに、何らかの個別の

働きかけが必要ではないかと思う。自尊感情の高一低群間の比較 (表5) で、講座前後を通して有意な差の見られた「母への信頼感」に関連した働きかけには注目すべき点があると考えられる。

2) 家庭の雰囲気

本調査対象における親子の家庭の雰囲気得点 (親子の合算96.9~98.81) は、菅原らの得点 (親子の合算93.57)⁸⁾ よりも高く、本調査集団は親子の家庭の雰囲気が比較的良好な集団である。

母親の感じる家庭の雰囲気は、講座1週間後 ($p = .031, < .05$)、1か月後 ($p = .008, < .01$) とも講座前より有意に高かった。このことは、子どもに読ませる手紙の書き手のほとんどが母親であったことから、出産時の状況や子どもへの愛情を綴るうちに、子どもや家族への思いが再認識され、結果家庭の雰囲気がより良く感じられたためであろうと推察される。また、講座前の家庭の雰囲気が低群であった子ども13名は、講座1週間後に得点が有意に高くなっており ($p = .025, < .05$)、講座が母親と家庭の雰囲気低群の子どもには良い影響があったと思われる。講座後母親の家庭の雰囲気が良くなったことが子どもに波及し、低群の子どもに影響として現れたことがうかがえる。菅原⁸⁾は、夫婦関係と家庭の雰囲気との関係性はおそらく一朝一夕に作られるものではなく、長い家族の歴史の中で醸造されていくものでありと述べている。父母の作り出す家庭の雰囲気が、子どもの心の健康にとって大切な要素であることを、親が意識できるような情報提供や取り組みが必要であると考えられる。

3) 親子間の信頼感

講座前の親子間の信頼感得点 (母への信頼感29.08、父への信頼感27.77) は、酒井ら¹³⁾の得点 (小学4~6年生平均、母への信頼感27.32、父への信頼感26.32) よりも高い。しかし、年齢が高くなるとともに父母への信頼感得点が低くなる傾向がある⁷⁾ことを考慮すると、小学4年生が約78%を占める本調査では、平均的な父母への信頼感を持つ集団であると考えられる。

子ども全体の父への信頼感が、講座1週間後 ($p = .031, < .05$)、1か月後 ($p = .018, < .05$) とも有意に高くなっていったのは、父への信頼感低群の子どもの得点の向上 (講座1週間後 $p = .022, < .05$ 、1か月後 $p = .049, < .05$) によるものと考えられる。講座でのお話から自分のいのちの始まりに父親も深く関わっていたと知ることや、講座後に親の手紙を読ん

たり話したりすることで父親もまた自分の誕生を喜んでいと認識され、父への信頼感が高くなったのではないかと推察される。また、講座後父母のどちらかと自分の生まれた時の話をした子どものうち、話を聞いて「うれしかった」と答えた子どもの割合が、講座前69.7%から1週間後では94.4%に、1か月後では92.6%に高くなっていた(表6)。この講座が、子どもにとって普段母親よりも交流が少ないと推察される父親の自分に対する思いを認識し、コミュニケーションを密にするきっかけとなったことがうかがえる。講座1か月後においても父への信頼感が講座前に比して有意に高いままであることは、一度認識されたこの思いに持続性のある可能性が示されていると考える。

子どもの母への信頼感低群においては、講座1週間後、1か月後とも講座前より得点が高くなっており、1か月後では有意な差がみられた($p = .005, < .01$)。本講座は、母への信頼感低群の子どもにも自分を産んだ時の母親の喜びを再確認し、信頼感が増すきっかけとなったと思われる。

2. 子どもの心の健康教育について

自分を大切な存在であると思える自尊感情や、信頼する重要他者の存在が子どもの心身の健康に不可欠であるということはよく知られているが、「どのようにしたら子どもの心の健康は増進するのか?」という命題に答えるのは難しいものである。松村ら¹⁷⁾は、自尊感情を心身の健康に影響を及ぼす性格の一つとしてとらえ、教育していくことが求められていると述べており、教育現場では自尊感情に焦点をあてた心の健康教育の実践も始まっている¹⁸⁾。本研究で取り上げた講座によって、自尊感情や父親・母親への信頼感、家庭で感じる雰囲気良かった子どもがいたことから、講座の取り組みが子どもの心の健康増進に寄与する一つの方法になり得ることがわかった。この講座が目指すところは、いのちの尊さを学ぶとともに、信頼する重要他者(親)から自分の生まれた時の喜びや思いの手紙を読んだり、共に話したりなどのコミュニケーションを通して、親子へ共感や共有体験の機会を提供することにある。たとえ一時的な尺度得点であったとしても、<良い>と感じた記憶の積み重ねが子どもの心の健康に寄与すると考えられる。子どもの心の健康教育においては、子どもとともに、心の健康を支える親(重要他者)に着目した取り組みを提供することが有意義

であると考え。子どものさまざまな問題が話題となる度に子どもの心に言及されることが多いが、親が子どもの心の健康に関心を寄せることは、学童期においては体の健康以上に重要なことである。それには子どもの前思春期の心性、健康教育などを親も学ぶという姿勢が重要であり、同時に親への心理教育の機会が与えられることを望む。以上のことから、子どもの心の健康を支える親に着目した本研究は、意義深いものであると思われる。

本研究は、比較対象群を設定しておらずA県内のみの対象者であるため、結果が講座の影響として厳密に論ずる根拠や一般化に限界がある。今後、比較対象群を設定し、他の側面からさらに子どもの心の健康と親子の関係を研究する必要がある。

V. 結 論

1. 自尊感情中群、父・母への信頼感および家庭で感じる雰囲気低群の子どもの講座後の尺度得点が高くなり、本研究で取り上げた講座の取り組みが、子どもの心の健康増進に寄与する一つの方法になり得ることが明らかとなった。
2. 子どもの心の健康教育においては、子どもとともに、子どもの心の健康を支える親に着目した取り組みを提供することが有意義である。

本研究は、青森県立保健大学博士前期課程修士論文を一部加筆・修正したものである。本研究の一部は、第57回小児保健学会および第10回国際家族看護学会においてポスター発表した。

本研究の調査実施にご協力くださいました皆様に、心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 文部科学省 スポーツ・青少年局学校健康教育課. 児童生徒の心の健康と生活習慣に関する調査報告書. 2002.
- 2) 大友秀人. 学校における「心理教育」の必要性. 児童心理 2009; 903: 19-26.
- 3) John Bowlby. 二本 武 監訳. ボウルビィ 母と子のアタッチメント: 心の安全基地. 第1版 東京: 医歯薬出版, 1993.
- 4) 藤原正博. 自我同一性と自尊感情の関係. 遠藤辰雄編. アイデンティティの心理学. 第1版 京都: ナ

カニシヤ出版, 1981: 85-89.

- 5) 影山隆之. 「保健」授業と心の健康についての考え方. 学校保健の広場 1998; 9: 24-27.
- 6) 茂木千明. 家族の健康性に関する一研究—大学生の子どもからの観点から. 家族心理学研究 1996; 10 (1): 47-62.
- 7) 酒井 厚. 対人的信頼感の発達. 第1版. 東京: 川島書店, 2005.
- 8) 菅原ますみ, 八木下暁子, 詫摩紀子, 他. 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連. 教育心理学研究 2002; 50: 129-140.
- 9) 蘭 千壽. セルフ・エスティームの形成と養育行動, 遠藤辰雄, 井上祥治, 蘭 千壽 編. セルフ・エスティームの心理学. 第1版. 京都: ナカニシヤ出版, 1992: 168-177.
- 10) Rosenberg, M. The measurement of self-esteem, Society and the adolescent self-image. Princeton. New Jersey: Princeton university press, 1965: 16-36.
- 11) 鈴木せい子 編. 助産師が伝えるいのちの教育—すべての子どもに「生きる力」を. 第1版. 大阪: メディカ出版, 2008.
- 12) 文部科学省. 児童生徒の問題行動対策重点プログラム. 有村久春 編. 「命を大切にす教育」をどう進めるか. 教職研修総合特集 2005; 166: 214-221.
- 13) 厚生労働省. 平成19年国民生活基礎調査. 第1巻, 2009.
- 14) 近藤 卓, 股村美里, Ya Wen Huang. 子どもの自尊感情に関する国際調査. 東海大学紀要文学部 2009; 91: 73-81.
- 15) 酒井 厚, 菅原ますみ, 菅原健介, 他. 子どもによる親への対人的信頼感: 児童・思春期の双生児を対象とした人間行動遺伝学的検討, 発達心理学研究 2003; 14 (2): 191-200.
- 16) Coopersmith, S. The antecedents of self-esteem. San Francisco: W.H.Freeman, 1967.
- 17) 松村 亨, 山崎勝之. 自律的でセルフ・エスティームに満ちた性格形成のための総合教育プログラム. 荒木紀幸, 倉戸ツギオ編. 健康とストレス・マネジメント, ナカニシヤ出版, 2003.
- 18) 坂本千代. 教育実践の最前線「自尊感情」を育てる授業と学級経営. 児童心理 2010; 64 (17): 1514-1522.

[Summary]

The purpose of this study is to clarify the course of life education (after this ,the course) influence of parent/child and aims at searching for a direction of mental health education for students. We compared the scores for before/after the course by utilizing a scale for self-esteem of child, a sense of trust between parent and child, and atmosphere of parent and child at home. We distributed a questionnaire to student (age: 10-11 years old), father, and mother in the timing of before the course, one week after the course, and one month after the course.

The score of a sense of trust for father and atmosphere of mother at home were improved at after the course ($p < 0.05$). The students, chose even one negative answer in self-esteem for score before the course, were improved for their scores after the course ($p < 0.05$). The students with low score for atmosphere of child at home and a sense of trust for father and mother before the course were also improved for their scores after the course ($p < 0.05$). In a mental health education for students, it will be significant to provide an approach to influence on father/mother with students.

[Key words]

mental health education, primary school children, self esteem, trust between parent and child, atmosphere of parent and child at home